

令和 4 年 6 月 4 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02365

研究課題名(和文) 沖縄音楽における現地録音の歴史的研究 田辺尚雄からLP『沖縄音楽総攬』まで

研究課題名(英文) A Historical Study of Field Recordings of Okinawan Music: From Hisao Tanabe to the Okinawa Ongaku Soran LP Record Collection

研究代表者

高橋 美樹 (TAKAHASHI, MIKI)

高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・教授

研究者番号：30403869

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：(1)田辺尚雄が1922年に実施した沖縄・八重山諸島音楽調査の成果を、いかなる方法で社会へ還元したのか明らかにした。(2)1953年沖縄芸能文化使節団による「琉球国劇公演」と東京・大阪で録音したレコードの関連性を明らかにした。(3)沖縄県立芸術大学附属図書館・田辺文庫のレコード目録を作成し、商業録音による最古の沖縄音楽レコード【大阪蓄音器1915年制作SP6枚】を発見した。(4)田辺の1921年～1940年アジア・沖縄の民族音楽調査について、現地録音の変遷を明らかにした。(5)LP16枚集『沖縄音楽総攬』の制作経緯と収録音源のジャンルを分類し、文化財保護政策と民俗芸能の関連性を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は蓄音器を端緒とする録音テクノロジーの発達、民族音楽調査の現地録音に与えた影響を解明した点にある。

本研究から人類学、民俗学、民族音楽学の分野に共通する研究方法＝「現地調査」における声、音、音楽の記録、解析に対して、新しい知見を導き出すことができた。特に、聴覚に基づいた記録方法として、蓄音器による録音技術を先駆的に導入した田辺の実践は、民族音楽学が録音・採譜・出版に依拠していた時代のフィールド・ワークを解明する資料であることを証明した。

研究成果の概要(英文)：(1) The study clarifies how the results of Hisao Tanabe's 1922 survey on music in Okinawa and the Yaeyama Islands contributed to society. (2) It also clarifies the relationship between the 1953 Ryukyu koku-geki public performance by an Okinawan performing arts and culture delegation and 78 rpm SP records recorded in Tokyo and Osaka. (3) The 78 rpm SP records in the Tanabe collection at the Okinawa Prefectural University of Arts library were catalogued, and six SP records produced by Osaka Chikuonki Co., Ltd. in 1915, the oldest commercial recordings of Okinawan music, were discovered. (4) The study outlines the history of field recordings with regard to ethnic music research conducted by Tanabe in Asia and Okinawa from 1921 and 1940. (5) The production process and genre of tracks on the 16 LP records in the Okinawa Ongaku Soran collection are classified and the relationship between the cultural asset preservation policy and folk performing arts elucidated.

研究分野：音楽学

キーワード：田辺尚雄 民族音楽学 沖縄 民族音楽調査 レコード 録音 蓄音器 沖縄民謡

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、植民地主義と録音産業に関する研究、民族音楽調査に関する研究が盛んに行われている。中でも、1930年代～1940年代に東南アジアの音楽調査を実施した黒沢隆朝の研究(梅田英春1997、劉麟玉2006)では、大東亜共栄圏という大義名分のもとで音楽調査を実施する研究者の責務が解明された。さらに、1930年代に中国とインドの音楽調査を実施した梶源次郎の研究(劉麟玉2011-2013 基盤研究(C)課題番号:23520171)では、現地の言語を習得して調査に挑むという、現在の民族音楽調査では当然の手法について指摘した。黒沢と梶に共通するのは、調査の成果を書籍化し、現地録音や収集したSPをレコード化した点である。

本研究の対象である田辺尚雄は日本で最初に民族音楽学研究のための現地調査を実施した人物である。1920年代～1930年代にかけて、朝鮮、台湾、沖縄、中国、樺太、南洋、満州を調査し、各地域で学術的な現地録音を実施した。調査記録をまとめた著書『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』等を刊行し、現地録音の音源をレコード化した。

高橋は2014年に田辺の沖縄・八重山諸島音楽調査に関する研究を開始し、下記3点が明らかになった。

- (1) 田辺が1922年沖縄調査期間に鑑賞した沖縄音楽を分析した結果、日本本土の音楽・楽器と歴史的関係が深い演目に興味を持ち、現地の研究者に説明を求めている。
- (2) 沖縄では田辺による音楽調査が演奏家や研究者に多大な影響を及ぼし、東京という〈中央〉へ音楽を発信する新たな志向が沖縄社会に導入された。
- (3) 田辺に沖縄調査を推薦した民俗学者・柳田国男、八重山諸島で音楽を解説した民俗学者・喜舎場永珣等、調査に関わった人脈の全容を解明した。

2. 研究の目的

本研究の目的は下記5点である。

- (1) 田辺尚雄が1922年に実施した沖縄・八重山諸島音楽現地調査の成果を、いかなる方法で社会へ還元したのか、明らかにする。特に、(A)ラジオ番組での公開、(B)講演会でのレコード再生、(C)歌舞伎舞踊の創作上演、に焦点を当てた。

(2) 1953年沖縄芸能文化使節団による「琉球国劇公演」(開催:東京・大阪)の演目・出演者等を整理し、公演地で録音されたSPレコードとの関連性を明らかにする。1953年11月16日～12月15日に沖縄→東京→大阪→神戸→沖縄と、海路と陸路を使いながら琉球国劇公演とレコード制作を実現した過程を辿る。

(3) 沖縄県立芸術大学附属図書館「田辺文庫」所蔵の沖縄音楽レコードについて、レコード会社別目録を作成し、録音曲のジャンル分類、起用された歌手・演奏家の活動を整理する。1915年～1958年発売レコードの制作経緯や社会的背景を辿り、近代沖縄における録音文化史の萌芽期を描き出す。

(4) 田辺尚雄によるアジア・沖縄の民族音楽調査について、現地録音の変遷を明らかにする。1921年～1940年朝鮮、台湾、沖縄、中国、樺太、南洋、満州を調査する際、田辺は音律測定・録音・写真・映像撮影の機材を日本から持参した。各地の録音曲目、録音方法、録音機材を分析する。民族音楽調査について、(A)録音テクノロジーの発達、(B)田辺の研究動向、(C)蓄音器・レコードの啓蒙活動、の視点から考察する。

(5) LP16枚集『沖縄音楽総攬』(コロムビア:1965)の制作経緯を整理し、収録音源のジャンルを明らかにする。さらに、琉球政府や日本本土における文化財保護政策と民俗芸能の関連性について追究する。

3. 研究の方法

【第一次調査】

田辺はいかなる方法で沖縄音楽を録音し、それらの音源をどのように社会へ還元したのか。その点を明らかにするため、国立劇場図書閲覧室、沖縄県立芸術大学附属図書館、沖縄県立図書館で資料を収集・整理した。ラジオ放送における音源公開を調査するため、国立国会図書館で『日刊ラヂオ新聞』、NHK放送博物館で「NHK確定番組表」を収集・整理した。

【第二次調査】

田辺の日本・アジアにおける民族音楽調査とその成果を把握するため、SP『東亜の音楽』全10枚(コロムビア:1941)、SP『南方の音楽』全6枚(コロムビア:1942)等、現地調査の録音音源を収録したレコード及び解説書を調査した。

【第三次調査】

黒沢隆朝、榊源次郎らによる日本・アジアにおける民族音楽調査の文献・音源を収集し、録音方法(現地録音、スタジオ録音)や音響機材を分析した。(例:黒沢 1973『台湾高砂族の音楽』)

【第四次調査】

LP『沖縄音楽総攬』(コロムビア:1965)の音源、文献を収集・整理し、録音曲や録音方法の実態を解明した。

4. 研究成果

(1)について、①1925年 JOAK ラジオ「日本音楽史講座」で沖縄音楽研究家・山内盛彬を招聘し、三線や箏を演奏させた。沖縄調査の案内役であった山内の学術成果を番組構成や選曲に反映させていた。

②1922年「啓明会第8回講演会」では沖縄調査の際、蠟管蓄音器で録音した音源を再生・公開した。

③1925年田辺は沖縄音楽・舞踊を盛り込んだ歌舞伎舞踊劇『与那国物語』を上演した。初演の歌舞伎座では主役を中村福助が演じたが、1928年、1932年と再演する度に劇場、配役、台本、選曲を改訂した。

④田辺は1928年『与那国物語』を基盤とした交響組曲『南島情調』を作曲、上演した。新日本音楽の形式に、沖縄民謡の主題を導入していた。

(2)について、①使節団員により、東京ではコロムビア・レコード、大阪ではマルフク・レコードにて、琉球古典音楽や沖縄民謡を録音した。

②コロムビアは本公演に合わせて使節団員によるレコード制作を計画し、古典9曲、沖縄民謡3曲、八重山民謡2曲、歌劇2作品、組踊1作品を録音した。

③マルフクは沖縄民謡1曲、宮古民謡1曲、八重山民謡1曲、新民謡7曲、歌劇2作品を録音した。

④公演の企画・実施から演目、渉外活動において、田辺や本田安次、柳宗悦らが貢献した。

(3)について、①商業録音による最古の沖縄音楽レコード【大阪蓄音器 1915年制作 SP6枚】を発見した。

②歌手・演奏家について、古典は各流派を代表する演奏家、沖縄・八重山民謡は商業演劇で活躍する俳優や地謡を起用した。

③選曲は大阪蓄音器が古典を重視し、日本蓄音器商会は沖縄民謡が多い。コロムビアは古典を重視しつつ新作民謡(例《安里屋ユンタ》)も録音した。ニッポン・レコードでは琉球方言の歌詞を共通語訳した「訳詩琉球民謡」を山内盛彬が録音した。

④那覇市内では〈録音→製造→宣伝→販売〉という基礎的な商業録音システムが、1915年～1936年に成立していた。

(4)について、①全7回の民族音楽調査の中で、音律の振動数測定装置を持参したのは1921年朝鮮のみである。田辺は1920年正倉院の楽器の音律調査に携わり、その研究成果の刊行後に朝鮮調査が行われた。

②田辺は録音用の携帯型機材を台湾、沖縄、樺太、南洋に持参した。1922年～1923年台湾・沖縄・樺太調査では写声蓄音器を、1934年南洋調査では日の本写音機を使用した。

③田辺は調査地における講演会で、レコードを蓄音器で再生しながら音楽を解説した。これは日頃の教育活動で蓄音器・レコードを積極的に活用していたことを反映している。大衆への蓄音器・レコードの啓蒙活動、そして、講演・講義での活用実績を踏襲し、調査地でも講演会を通じて同様の啓蒙活動を展開していた。

(5)について、①LP集は東京文化財研究所とコロムビア・レコードの共同で制作された。現地録音は1964年～1965年に2回実施された。沖縄本島ではラジオ放送局のスタジオを使用し、離島では公共・宿泊施設を活用して収録された。

②収録音源・全279トラックのジャンルは祭祀音楽=83トラック、雑歌=61トラック、祝唄=23トラック、舞踊音楽と労作唄が共に20トラックであった。

③LP集最大の特徴は民俗芸能の場で歌い、踊られる歌を多数収録した点にあり、全体の16.5%を占めた。

④琉球政府文化財保護委員会が1956年度～1965年度に「助成の措置を講じた無形文化財」の中で、古典音楽・湛水流、伊集の打花鼓、泡瀬の京太郎、首里汀良の獅子舞、黒島穂利踊、南の島踊がLP集に収録された。

⑤LP集を解説した三隅治雄は1967年～1974年国立劇場の琉球芸能公演(全4回)で演出、構成、監修を務めた。沖縄の若手舞踊家・俳優を集め沖縄歌舞団を結成し、国内外の公演を成功させた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 高橋美樹	4. 巻 81
2. 論文標題 田辺尚雄によるアジア・沖縄の民族音楽調査 録音テクノロジーの発達を視点として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 高知大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 219-261
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 高橋美樹	4. 巻 80
2. 論文標題 NHK録音による沖縄音楽レコード:1950-1951年 湛水流・山内盛彬と「沖縄諸島の古謡と踊の会」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高知大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 231-254
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 高橋美樹	4. 巻 80
2. 論文標題 沖縄県立芸術大学附属図書館田辺文庫所蔵・SPレコード目録 田辺尚雄旧蔵・最古の沖縄音楽レコードを探る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高知大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 255-292
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 高橋美樹	4. 巻 79
2. 論文標題 田辺尚雄における沖縄・八重山諸島音楽現地調査(1922年)の成果と社会的還元 JOAK「日本音楽史講座」、歌舞伎舞踊劇『与那国物語』をめぐる	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 高知大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 203-232
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋美樹	4. 巻 79
2. 論文標題 1953年沖縄芸能文化使節団による「琉球国劇公演」(東京・大阪)とレコード制作 戦後初の日本本土公演、文部省芸術祭参加作品を探る	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 高知大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 233-256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋美樹	4. 巻 78
2. 論文標題 北米・ハワイ沖縄系移民のSPレコード制作 琉球古典音楽、沖縄民謡の録音をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 高知大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 265-278
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋美樹	4. 巻 78
2. 論文標題 歌集にみる《安里屋ユンタ》の普及プロセス 《草津節》と 沖縄よいとこ一度はおいで~の関連性を 探る	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 高知大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 247-263
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋美樹	4. 巻 82
2. 論文標題 LP集『沖縄音楽総攬』(1965年)と沖縄の民俗芸能 収録ジャンルと文化財指定をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 高知大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 191-231
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋美樹	4. 巻 52巻2号
2. 論文標題 沖縄音楽の民族音楽学的研究 レコード及び田辺尚雄の沖縄音楽調査を中心に (第40回沖縄文化協会賞・仲原善忠賞受賞記念・研究論文)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 沖縄文化	6. 最初と最後の頁 118-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 高橋美樹
2. 発表標題 沖縄県立芸術大学附属図書館田辺文庫所蔵・SPレコード目録 田辺尚雄旧蔵・最古の沖縄音楽レコードを探る
3. 学会等名 東洋音楽学会・第73回沖縄例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋美樹
2. 発表標題 沖縄音楽の民族音楽学的研究 レコード及び田辺尚雄の沖縄音楽調査を中心に
3. 学会等名 沖縄文化協会「第40回沖縄文化協会賞・仲原善忠賞 受賞記念研究発表」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋美樹
2. 発表標題 田辺尚雄における沖縄・八重山諸島音楽現地調査 (1922年) の成果と社会的還元 沖縄・日本本土をめぐる 媒介者 として
3. 学会等名 東洋音楽学会・第68回全国大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

2019年1月1日『沖縄タイムス』「沖縄歌謡最古の音源 / 1920年北里氏が採録」p.1
「高知大学の高橋美樹准教授(音楽学)によると、沖縄で現地録音され、現在も聞ける最古の音源は、音楽学者の田辺尚雄氏による1922(大正11)年の八重山民謡『ジラバガヌ・ソウ・ソウ・ジラバ』とされてきた」(栗国雄一郎)

2019年3月28日『朝日新聞(大阪)夕刊』「最古の沖縄歌謡現代によみがえる / 1920年に言語学者採録大谷大がCDに」p.5
「沖縄歌謡やその録音文化史に詳しい高橋美樹・高知大准教授(音楽学)によると、これまでは音楽学者の田辺尚雄(ひさお)(1883-1984)による22(大正11)年の八重山民謡『ジラバガヌ・ソウ・ソウ・ジラバ』が現在聴ける最も古い研究用の沖縄歌謡の録音だった。高橋さんは「今回発表された北里の音源は田辺より2年早く、最古の音源の記録が塗り替えられた。また、沖縄本島、宮古島、八重山諸島の沖縄県全域にわたる同時期の現地録音は極めて貴重な」と評価する。(大村治郎)

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------